

# 日本人の



第2部 忘れもの 12

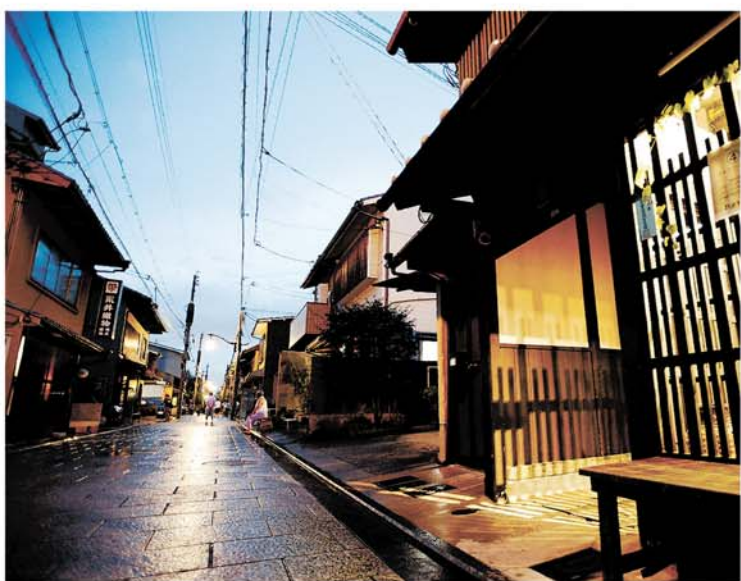
## ツールとしての歴史

過ぎ去った時間、歴史をツール、つまり何か役に立つ道具とか手段などという言葉でとらえることに、多くの方は違和感を持たれるだろう。

近代の日本人は、特に戦後においては、過去の時間の成果である歴史を、封建的などとして否定するべきもの、つまりは故意の忘れものとして扱ってきた。たとえば景観でいえば、歴史をしのばせる古い町並みは非効率として撤去されてビルやマンションになり、民家の家並みもプレハブ住宅にかえられていった。

暮らしは便利になったが、地域への誇りを持つてなくなった

たしかにそれによって新しい景観ができ、暮らしも前進したことは事実にしても、京都にかぎらず日本全国どこでも個性あるマチの姿が次々に消えた。日常的な暮らしは便利になったかもしれないが、他ならないそこで生まれ、暮らし、生涯をすすんだという、地域・地元への誇りを持つてなくなってしまうのである。日本列島が開発プー



ム、バブル景気などに浮かれていた時代のことだ。経済的な発展を追い求めた結果、京都は京都でなくなる寸前まで達していたように思える。「日本に京都があつてよかった」といえる日の来ることを、私は予想できなかった。では何故京都が京都でなくなる危機を回避できたのか。古いとされ、排除する対象としてみ扱われ、忘れ去られるべきものであつた過去の時間、歴史の遺産を、振り返りまた顧みてそれを京都再生のツールとすることに成功したからだと思う。ありふれた京都の町並み、場所によっては明治はじめからの住宅もあつたし、その多くは建てつけは悪いし、冷暖房もままだらない。しかし今それが町家ブームでもはやされていることに象徴的だが、物理的な利便をこえて人の心の奥底にひびくものだったのである。「京都らしい」という言葉がいかに似合うスポットが京都にはいくつもあるが、それらはほとんどすべて私たちが古いも



井上満郎 京都市歴史資料館長

## 記録として歴史を 次代に伝えることは 現在を生きる私たちの 未来への責務。

ム、バブル景気などに浮かれていた時代のことだ。

経済的な発展を追い求めた結果、京都は京都でなくなる寸前まで達していたように思える。「日本に京都があつてよかった」といえる日の来ることを、私は予想できなかった。

では何故京都が京都でなくなる危機を回避できたのか。古いとされ、排除する対象としてみ扱われ、忘れ去られるべきものであつた過去の時間、歴史の遺産を、振り返りまた顧みてそれを京都再生のツールとすることに成功したからだと思う。ありふれた京都の町並み、場所によっては明治はじめからの住宅もあつたし、その多くは建てつけは悪いし、冷暖房もままだらない。

しかし今それが町家ブームでもはやされていることに象徴的だが、物理的な利便をこえて人の心の奥底にひびくものだったのである。「京都らしい」という言葉がいかに似合うスポットが京都にはいくつもあるが、それらはほとんどすべて私たちが古いも



正法寺(京都府八幡市)の洛中洛外図屏風/右隻部分・京都府立山城郷土資料館提供

のとかつて思いこみ、否定・克服しようとしてきた要素からなっている。記憶としての歴史は忘れられ、消えてゆくもの

ひるがえって将来の京都を考えてみよう。京都が京都で今あるのは、千年の歴史の遺産があるからだ。だが油断してはならないだろう。記憶としての歴史は時とともに変容し、さらには忘れられ、消えてゆくものなのだから。だからそれをその時々ツールのとするには「記録」という行為が欠かせない。個人によつて挿りや片よ



本居宣長「古訓 古事記」(井上蔵)

りのある「記憶」ではなく、しっかりと共有されるべき歴史の「記録」が必要である。日本人は、千年をこえる以前から「古事記」「日本書紀」をはじめとする豊かな歴史の記録を持っている。これらは当時の人々が手書きとして書いたものではけつてない。未来への指針となるべきものとして残したのであつて、記録しなれば変形したり失われたりするからの行為であり、未来へ向けての作業だつたのである。ひとり京都にとどまるものではないが、記録として歴史を次代に伝えることは、歴史を忘れものにならないための、現在を生きる私たちの未来への責務であらう。

戦後、日本人は物の豊かさと引き換えに大切なものを忘れてきたのではないだろうか。日本人が忘れつつある価値観が今も生き続ける千年の都・京都から温故知新の知恵を発信する。(毎週日曜日に掲載します)

### きょうの季寄せ(九月)

鶴鶴や 水瘦せて 石あらはる、

正岡子規



「九月十九日未明子規逝く。云々」と前書きして、明治35年、高浜虚子は「子規逝くや十七日の月明に」と詠んでいる。

掲句は明治27年作、鶴鶴は石たたき、庭たたきの別称を持つ通り忙しく、尾を上下にして動かす習性がある。秋分の節の終わりを「水瘦せて潤る」という季節の語に「水瘦せて」は呼応する。(文・岩城久治)

### 「きょうの心伝て」

山本重夫 無職(滋賀県高島市)70歳

#### 地方の誇り

旅は家を一歩踏み出したときから始まり、見聞を広げる目的の地にて様々な心象、風土、歴史、人々、味覚、土産などに接し、その地域や地方の特性・特徴に触れ学ぶことではないだろうか。

ところが、昨今の地方の現況はどんぐりの背比べとばかり、なんでもあり。北海道に沖繩物産があり、沖繩に北海道特産品を見かけるありさままで、わが愛する京都の産品として、北に南に小京都たる地域で見かけられる。

これほど、愚かなことがあつてはならず。「氾濫する情報と守るべき伝統」から逸脱してしまつていくことに気付かなければならない。

首都機能分散や道州制への変遷が行われても、「地方の誇り」、ポリシは揺るがないものにして不動でなければならぬのではなからうか。

#### 「きょうの心伝て」募集

●あなたの思う「日本人の忘れもの」は何ですか?暮らしの中で忘れてはならないと思う日本人の心象、伝えた京都に残る心遣いなどを寄せて下さい。京都新聞社で選考、選考する場合があります。原稿は返却いたしません。タイトル(12文字以内)と本文(400文字以内)、郵便番号、住所、氏名(匿名は不可)、職業、年齢、電話番号を明記し、〒604-18577 京都新聞COM「きょうの心伝て」係まで。 Fax:075-224-2200 E-mail:wasuremono@mb.kyoto-nichi.jp

●日本人の忘れものは、京都新聞ホームページ [http://kyoto-nichi.jp/kyo\\_kv/info/nwc/](http://kyoto-nichi.jp/kyo_kv/info/nwc/) でご覧いただけます。

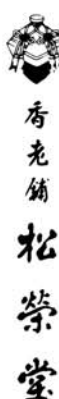
## 面影の忘れぬ人によそへつつ 入るをぞ慕ふ秋の夜の月

後徳大寺左大臣



真西に日が沈むという彼岸の日 その光の先の人を慕って呼びかける。 やがて、銀色の月が天空に昇るまで。 恋しき人の面影に似た月よ 燃り曇る山の端に隠れないで せめて、懐かしい香りとともに 此の岸に佇む私を照らしてほしい。

京都本店 京都市中京区烏丸通二条上ル東側 電話 075(212)5590  
産寧坂店 京都市東山区清水3丁目334 青龍苑内 電話 075(532)5590  
通信販売部 7/11 0120(81)2307 受付時間 午前9時~午後5時 (土・日・祝日を除く)



香老鋪 松茶堂